ゲーテの宗教的世界

友田　孝興

一

宗教に対するゲーテの何ものにも拘束されない自由な立場は、「我々は自然研究に際しては汎神論者、詩作に際しては多神論者、道徳的には一神論者である」[1]というこの格言によく示されている。しかしその自由な立場ゆえに、彼はしばしば、一神論者としての篤信のキリスト教徒から異端視され、信仰の欠如に対する非難を受けなければならなかった。だがこのことは、エッカーマン流に言うならば[2]、ゲーテが彼らと同じ信仰をもたなかっただけのことであり、彼らの信仰が狭小すぎて、ゲーテの神性に対する敬虔感情と畏敬の念とを理解するだけの力を彼らがもたなかったからにすぎない。

ゲーテは、「主なる神さま」(der *Herr* Gott)、「愛する神さま」(der *liebe* Gott)、「善良なる神さま」(der *gute* Gott) といった人格化された神の名を、毎日うわの空で称えることが、あたかも信仰の証しででもあるかのように思い込んでいる僧侶や信徒に対して、このような「人々は、理解することも想像することも全くできない至高の存在を、あたかも自分たちと同じものであるかのように取り扱っている。……しかし神の偉大さを実感するならば、口が利けなくなり、畏敬のあまり神の名を呼ぶこともできなくなるであろう[3]」と言う。「『我は唯一の神を信ず！』、これは美しい賞讃すべき言葉である。しかし神がどこに、どのように顕現するのかを見て、神を認知すること、そこにこそこの世の浄福がある[4]」。これらの言葉からも明らかなように、

日々、神の名を口にし、しかも神から遠く乖離した財福を願う信仰者に対しては、ゲーテは常に皮肉な言葉を投げかけるのである。

彼は、キリスト教徒のような「我は唯一の神を信ず！」という立場からすれば、汎神論的に「神を自然の内に、自然を神の内に見る」[5]がゆえに、異端者であり、異教徒であり、無神論者とさえ見做されもする。しかし、「一切は必然であり、従っていかなる神も存在しない」[6]というドルバック流の無神論者でないことだけは言を俟たない。むしろその逆で、自然の必然の内に、彼は神的なるものの働きを観知するのである。つまり、「ラファーターにとって不可解に思われたことは、どうして人間は、同時にキリスト教徒であることなく、生存し得るのかということである」[7]が、ゲーテはこのような、キリスト教徒にあらずんば人にあらず、といったような偏狭な宗教的立場に立つことができなかった。「キリスト者か無神論者か！」(Entweder Christ oder Atheist!) という二者択一を迫られるなら、ラファーターの問いそのものが観念の遊びであるがゆえに、彼は「おそらく私は無神論を選ぶ決心をすることにもなろう」[8]と皮肉まじりに語るのである。しかし彼の本心は汎神論的有神論ともいうべき立場に立っている。彼はヤコビ宛の手紙の中で、スピノザを弁護しながら、「あなたは、スピノザの全哲学説の根拠をなすところの、残余の一切がこれに基づき、これより流出するところの、最高実在を承認している。彼は神の存在を証明するのではない。存在が即ち神である。そしてこのことのゆえに他の人々が彼を無神論者と非難するなら、私は彼を最大の有神論者、然り、最大のキリスト者と名づけて讃えたいと思う」[9]と書き記している。つまりゲーテは、スピノザに対する弁護と賞讃を通して、実は彼と同様に、「私は神的なる存在を個々の事物の内においてのみ、そしてそれらからのみ認識する」[10]という自己の敬神的立場を表明しているのである。観念の遊戯による神の存在証明には何の意味もない。ゲーテがスピノザから得たもの、そして自己の自然研究から得たもの、それは、

いかなるものも無に壊滅することはできない！
永遠なるものがすべての内に働き続けている。
存在に拠って自己を幸せに保持せよ！
存在は永遠である。なぜなら法則が
生きた宝を守り、
その宝で万有が自己を飾っているのだから。[11]

という、万有に内在する神的生命の、証明無用の実感である。ゲーテは、自分が決して他人から非難されるような無

神論者ではなく、むしろ汎神論的な有神論ともいうべき立場にあることを表明して憚らない。

学問と芸術を所有する者は、
宗教をも持つ。
前の二つを所有せざる者は、
宗教を持て。[12]

この詩からも明白なように、ゲーテには学問（とりわけ自然に対する学問的研究）と芸術とに対する矜恃がある。つまり自己を最高の理性にまで高め、それによって真理の把捉に誠実に努める者には神性との出遇いは必然であり、自ずと人間の限界と本質、並びに一切の生の根源的連帯性を教えるところの宗教を持つことになるのである。「前の二つを所有せざる者は、宗教を持て」、これは人間存在にとっていかに宗教が大事であるかの表明でもあるが、しかしゲーテはその裏で、常に神の名を口にしながら神から遠く隔たっている者（ゲーテを非難する者）に対して、君たちは学問も芸術もできないのだから、宗教でもやっておくのがよかろう、と皮肉をこめて反撃しているのである。

二

さて、ゲーテに対する宗教的非難は、彼が汎神論的立場を固持したことによるが、それは自然研究者としてのゲーテにとっては、捨てることのできない、自然との感応から獲得された根源的な立場であった。つまり彼の宗教的世界は自然そのものの生の脈動から構築されているのである。それゆえに彼の宗教的世界の内容を明らかにするためには、まず彼の自然観を見ておかなければならない。

ゲーテにとっては自然は有機的な生命体であった。有機体においては、すべての部分が一部分に、各々の一部分がすべての部分に作用するのであるが、自然こそはまさに、部分と全体とが不可分の連関的交互作用の中に包括され、しかも普遍的原型と多様的可動性とが全体の中に統一されているところの有機体に他ならなかった。「合一せるものを分裂せしめ、分裂せるものを合一せしむることこそ自然の生命である[1]」。つまり自然は、多彩な姿を呈しつつ、収縮と拡張との極性的作用によって、無限にメタモルフォーゼ（変態）を繰り返している。しかも「永遠なるものがすべての内に働き続けている」。なぜなら、この永遠なるものがなければ、すべては無に帰してしまうからである。「すべての部分が合して完全なる全体を形成すべき場合には、何か特殊なものがあちこちに孤立することは許されない[2]」。自然は極めて大きな自由を持って生動しているが、

決して根本法則から離れることはできない。現象がどれほど孤立的に見えようとも、そこには必ず永遠の生命法則が脈搏っている。たとえどんな特殊が現出しようとも、普遍的全体のイデーによって特殊的部分が支配されているがゆえに、特殊の生こそは普遍のイデーの象徴的顕現なのである。ゲーテは、このような自然の多様な現象において、有機的世界統一の永遠の生を見たのであった。

さて、このような有機的自然に対して、彼は「生きた形態を如実に認識し、その外部の見えかつ捉えることのできる諸部分を連関において把捉し、それらを内部を暗示するものとして取り上げ、かくして全体を直観においていわば支配せんとする衝動」[3]をもってたち向かうのである。つまり、自然という有機的生命体においては、常に形成と変形が繰り返され、しかも量的変化は同時に質的変化を惹き起こすがゆえに、現象形態を単に比量的に抽象し、個々の対象を静的要素に固定するだけでは、事物の本質を捉えたことにはならない。科学的認識においては、悟性による定量的・因果律的決定論というものが不可欠ではあるが、しかし科学の把捉する像が、定性面を排し、因果律的定量面にのみ自己を限定するならば、それはあくまでも世界像の一面にしかすぎないことになる。そこでゲーテは、形態によって現われる現存在を生きた関係ある機能において洞察する能力としての理性直観によって、対象に内在する「根源現象」(Urphänomen)を捉えることに、科学的認識の窮極点を見出すのである。悟性では捉えられない、現象を通して理性直観に啓示されるところの、高次の律動的生命の現われ、これが根源現象である。「悟性では自然に達し得ない。神性に触れるためには、人間は自己を最高の理性にまで高めることができなければならない。神は自然の、あるいは道徳の根源現象の内に現われる。神性は根源現象の背後に潜み、根源現象は神性から流れ出る」[4]。ゲーテにとっては、真なるものと神的なるものとは同義的である。「真なるものは神に似ている。即ち真なるものは直接には現象しない。我々はそれをその顕現から推知しなければならない」[5]。真なるものの象徴的顕現としての根源現象、ゲーテはそれを次のように表現する。

根源現象
認識可能なものの窮極として理念的
認識されたものとして現実的
あらゆる場合を包含するがゆえに象徴的
あらゆる場合と同一的[6]

根源現象というものは、認識の可能的窮極点として理性直

観にのみ啓示されるものであるがゆえに理念的であるが、しかし観察者の眼前に赤裸に示されている現象でもあるがゆえに現実的なのである。しかもあらゆる場合がここに濃縮され、ここからあらゆる場合が演繹されてゆく、つまり特殊でありながら普遍のイデーを啓示するがゆえに象徴的であり、どれほど形を変えて現われようとも、もとの単一なるイデーに還元され得るがゆえに同一的なのである。主体と客体とが合一し、主体の理性直観に啓示されるところの根源現象こそは、ゲーテにとっては実り豊かな神の息吹の結実であり、現実の特殊の内にあって普遍生命の本質を象徴するものであるがゆえに、認識の窮極目標点として、自己の生の一切の営みの原点として、最重要視されることになる。

三

人間の認識が許された窮極点としての根源現象、そしてそこに無限の意味をもって象徴的に顕現する神性を、ゲーテは畏敬の念をもって受けとめるのである。彼が自然研究において見出したこの根源現象こそは、真理と神性の生きた動的・象徴的顕現の場に他ならない。従って動的真理の探究は神性との出遇いなしにはありえないことを彼はここに確信することになる。彼にとっては「信仰とは不可視的なものへの愛であり、不可能なもの、あり得ないようなものへの信頼である」[1]。彼の根源現象の内に顕現する神性への信仰は、キリスト者の罪と悪から救済されるための信仰とは大きな隔たりをもつが、しかし彼にとってはそれこそが、狭隘な断片的固定概念を打ち破り、思考を促進することによって新たな真理の意味の世界を切り開く力を持つのである。そしてこの自然研究から得た根源現象の理念を彼はキリストにもあてはめるのである。

> 人もし、キリストを崇拝し彼に畏敬を表わす気持が私の本性に存在するかと問うならば、私はその通りと答えよう。私は彼を道徳の最高原理の神的な顕現として彼に頭を下げる。人もし、太陽を崇拝する気持が私の本性にあるかと問うならば、私は再びその通りと言おう。なぜならば太陽は同じく至高者の顕現であり、しかも、我ら地上の子らに知覚することが許される最も力強い啓示であるからだ。[2]

つまり、ゲーテはキリストを神性の道徳的根源現象として捉え、崇拝するのである。また太陽を至高者の創造的・生産的根源現象として畏敬することも憚らない。このことのゆえに、彼はキリスト教の信仰を欠く異端者と見做されも

するのであるが、しかしそれはキリスト教の信仰の否定的異端者を意味するのではなくて、それを超えるところの肯定的異端者を意味すると言わなければならない。

聖書についても、ゲーテは「永遠に生きた書物」（ein ewig wirksames Buch）であり、それゆえに、完全にはそれを理解し尽くすことはできないが、しかし「聖書は全体としては尊厳であり、個別においては有益である」[③]と言う。但し、理性を無視してドグマ的に取り扱われるならば有害であり、真実の象徴的啓示として豊かな純粋直観をもって受容されるならば有益である、という限定条件は留保されなければならない。これが聖書に対するゲーテの基本的な考えである。また教団組織としての教会に対しても、純粋で強烈な神の啓示を正視できない人間が存在する限り、その強力な純粋啓示としての神の眩光を和らげ、すべての人々に救済の道をさし示す調停者として、神の啓示と人間との間に、教会が介在することの有益性を彼は容認している。[④]しかし、これらの容認は一種の限定条件つき肯定であって、彼が限定条件をつけざるを得ないところに、現実のキリスト教的信仰を超えるところの、より大きな敬神の念に支えられた彼の肯定的異端性が存在する。つまりゲーテにとっては、これはキリスト教という現実態の宗教の限界を超えて、その不十分さを補完せんがための異端性なのである。

ゲーテの考えによれば、

すべての宗教は、直接に神自身によって作られたものではなくて、卓越した人々の産み出したものであるからして、多数の同じような卓越者たちの要求と理解に対しては配慮がなされている。[⑤]

古代ギリシャの宗教においても、至高なる無窮存在の個別的現象が、それぞれの特性を有する神々によって具体化されたのであるが、しかし個々の神は限られた存在であって、それらを結び合わせた全体の中には、どうしても空白部分が残ってしまう。そこでギリシャ人たちは運命という理念を考え出さざるを得なくなる。これと同様に、

キリストは唯一の神を考え、自己自身の内において完全なものと感じたところの一切の特性を、その神に付与したのである。従って神はキリスト自身の美しい内面をそなえた、キリスト自身と同様に善と愛とに満ちた存在となった。[⑥]

このことは善良な人々にとっては、自己の信仰を深めるのに極めて好都合であった。

しかし我々が神性（Gottheit）と呼ぶこの偉大な存在

は、人間の内のみならず、豊かで強力な自然の内にも、強大な世界の出来事の内にも現われるものであるからして、人間の性質をもとにして作られた神の観念では、もちろん間に合わなくなってくる。[7]

ところが多くのキリスト者や僧侶たちは、この不十分さや矛盾に対して何の留意も示さず、自己を天地創造の目的と見做し、自己に役立つものにのみ目を向け、それらが人間のために存在しているかのように錯覚し、「他の被造物を都合のいい養分として貪り喰いながら、人間本位の神を認めて、父のように自分を養ってくれる神の慈悲を讃えている」。[8]このような人間本位の空語化した、しかも人間の美しい内面的特質を与えられながら、一切の被造物に内在することのない全能の超絶者としての「神」（der Gott）の観念、この観念にゲーテは停留することができなかった。むしろ彼にとっては、

自然も我々人間もその一切が神的なるもの（das Göttliche）によって貫かれている。そしてそれは我々を支え、我々はその内に生き働き存在し、永遠の法則に従って苦しみ喜び、その法則を知ると知らざるとを問わず、その法則を行じ、またその法則は我々に対して行ぜられているのである。[9]

このような「神的なるもの」（das Göttliche）・「神性」（die Gottheit）という言葉でもってしか表現しえないところの、自然の一切を貫流し世界に大きな生産力を与えるところのもの、そのような万有に不可思議の法として遍在するところのものこそがゲーテの神なのである。

あるときエッカーマンは、鳥もちで捕獲された一羽の鶯の親鳥と、巣の中にいる数羽の雛鳥とを貰い受け、次のような感動的な光景に出遇うことになる。それは、親鳥が、窓から放してやっても、再び囚れの身になることの危険をもかえりみず、また雛鳥のところへ餌をやりに帰ってくる、という光景であった。この親鳥の雛鳥に対する大きな愛に感動して、そのことを彼はゲーテに報告すると、ゲーテは、

ただ外部から世界をつき動かす神とは何だろう。
指先で万有を回転させる神とは何だろう。
世界を内部から動かしてこそ本当の神だ。
自然を自己の内に、自己を自然の内に宿し、
神の内に生き働き存在する一切が常に
彼の力を、彼の精神を体してこそ本当の神だ。[10]

という自己の詩を引用しながら、「もし神が鶯に、雛へのこの強力な本能を与えていなかったら、またこれと同じことが自然の一切の生きものに行きわたっていなかったら、

世界は存立できなかったであろう！――しかし、神の力はいたる所に広がっており、永遠の愛はいたる所に働いているのだ」[11]と表明する。そしてこのような「世界を維持し、全自然に行きわたっている扶養の原理」が美しい比喩となって顕現するところに、彼は「神の遍在の真の象徴」を見てとったのである。[12]神の存在の神学的証明は理性の批判によって斥けられたが、しかし証明としては妥当しないことでも感情としては妥当する、というのが彼の基本的な立場である。彼の純粋感情は、稲妻や雷鳴や嵐の中に、超絶的な偉大な力の接近を感じるのであり、花の香りや微風のそよぎの中に、優しい慈愛に満ちた存在の訪れを予感するのである。

四

しかし、ここで注意しておかなければならないことは、ゲーテにあっては、もともと神の存在の神学的証明というキリスト教的な非論理の論理（信仰の論理）は、自己の宗教観に相応するものではなかったということである。神の存在証明は不動の信仰をおいて他にはあり得ないが、しかし彼にとっては、罪と罰からの救済に不可欠の、信仰の定言命令に随順する質をもたなかったがゆえに、証明そのものが用をなさなかった。宗教を道徳に還元し、罪に対する恐怖を煽り、死後における地獄の懲罰や責苦を強調し、そして罪深き人間を救うために、無限の全能の神が有限の人間の姿をとってこの世に現われ、イエス・キリストの血によって、あらゆる罪から人々を解放する。その恩恵に浴するためには、神と人間との絶対的な異次元的差異を自覚し、原罪的存在としての自己を否定して、神への信仰に生きることが不可欠事である、とするこのようなキリスト教の教会の立場は、自己を肯定し、自己を畏敬することを通して神を信知するゲーテの立場と大きく異なっている。

この両者の立場の相違は、換言するならば、窮極的にはキリスト者とゲーテとの人間観の相違に帰着する、と言うことができるように思われる。つまり人間存在を、神と絶対的異次元性における「原罪」（Erbsünde）を背負った被造物として見るか、神との相似的同次元性における「原徳」（Erbtugend）をもった被造物として見るかの違いである。

人間の本性のある種の現象が、道徳の側から見た場合、一種の根本悪、原罪を人間の本性に負わすことを我々に強いるならば、人間の本性の他の顕現は、同様に原徳を、生得的善意、正直、そしてとりわけ畏敬への傾

向を、人間の本性に認めることを要求する。[1]

ゲーテは原罪を認めることにやぶさかではないが、しかし人間の本性が原罪のために腐敗し、いささかの善根もそこには見出され得ないがゆえに、人間は自己の諸々の力を完全に放棄して、すべてを神の恩寵に期待するより他に道はない、とする教説に従うことができなかった。むしろ、原罪を否定したペラギウス（Pelagius: 五世紀のアイルランド出身の修道士）のように、「人間本性の内部になお、神の恩寵によって生を吹き込まれて、精神的至福の喜ばしい大樹へと成長し得るある種の胚芽の宿っていることを認める」[2]ことがゲーテの信念であった。この原徳という胚芽こそは、「神から恵まれた人間本性」（gottbegabte Menschennatur[3]であって、この仏性にも比すべき神性としての原徳をすべての人間は自己の本性として有している、というのが彼の人間観の原点なのである。このことは、本質的には人間の神化であって、神と人間との絶対的な差異を説くキリスト者からすれば、異端的と言わざるを得ないのは当然である。しかしゲーテは、「美しき魂の告白」（Bekenntnisse einer schönen Seele）において、その告白女性の叔父の口を借りて、自己の宗教的信念を更に次のように表明する。

もしもわれわれが、世界の造物主がみずから被造物の姿をとって、被造物としてしばらくこの世におられたということを可能だと考えることができるなら、造物主がそれほど密接に被造物と一体になりうるというだけで、被造物も無限に完全なものだと思わなくてはならないね。だから被造物としての人間という概念のなかには、神という概念と矛盾するものはないはずだよ。たといわれわれがあるていど神と似ていないとか、神から離れているとか感じることがあっても、悪魔の代言人のように、いつも人間の本性の弱点や欠点ばかりを見ないで、むしろわれわれが神に似ているという主張を裏書きしうるようなあらゆる美点をさがし求めるのが、いよいよわれわれの義務になってくるわけだね。[4]

有限存在としての人間の不完全性を自覚するキリスト者にとっては、無限存在としての神の完全性を、被造物としての人間の内に見出すということは、まぎれもなく信仰の放棄であり、不遜きわまりない瀆神的行為というより他はない。しかしスピノザの「神即自然」（deus sive Natura）を自己の生の立脚地とし、「存在と完全の概念は全く同一である」[5]ことを確信するゲーテにとっては、それゆえに「存在即神」（Das Dasein ist Gott）[6]が帰結され、「神を自然の

内に、自然を神の内に見る」ことが人間の本来的な、自然な在り方となる。

このようなゲーテの立場は、彼自身の言葉で言うならば「普遍的宗教・自然的宗教」（die allgemeine, die natürliche Religion）の立場である。

普遍的宗教・自然的宗教は本来信仰を必要としない。

というのは、創造し、秩序づけ、指導する偉大な存在は、自己を我々に理解させるために、いわば自然の背後に隠れているのだという確信、このような確信はすべての人におのずと湧き出てくるものだからである。[7]

つまり、この自然的宗教は、世界秩序を全体として導く神の摂理の確信にもとづいているがゆえに、万人に通じる普遍性をもつのである。しかもここで特筆すべきことは、この宗教は「信仰を必要としない」ということである。従ってゲーテはまさに信仰を必要としない敬神者なのである。彼がスピノザに魅了されたのは、「神を真に愛する者は、神にも自分を愛せよと望んではならぬ[8]」というスピノザの無私の精神に触れたからであったが、このスピノザの精神に生きるゲーテにとっては、財福信としての、救済とひきかえに信仰が求められる「特殊的宗教」（die besondere Religion）に従うまでもなく、自然＝神であるがゆえに、自然の根源現象に触れるとき、信仰を必要とすることなく、自ずと神の法の中に抱かれていることが体感されるのである。

五

ゲーテは「西東詩集のよりよき理解のために」の中で、「古代拝火教徒の敬神は自然の直観に基づくものであった。彼らは、昇る太陽を壮大無比の現象と見、造物主を崇める気持でそれに向かった[1]」と記している。彼らにとっては、太陽や火は、一切を照らし暖める神の代理者であり、尊き光の反映であった。ゲーテは、この感覚世界の被造物の内に神の遍在を信じる「崇高純一なる自然宗教」（die edle reine Naturreligion）を親近の情をもって讃美し、眠りから覚めると直ちに最初の日の光を求め行く彼らの敬神行為の内に、自己の宗教体験の反映を認めるのである。なぜなら彼らにとっても、太陽は神性をその背後に宿す愛と行為の根源現象であったからである。救済のための信仰の定言命令を受けることなく、能照の神性と所照の自己を、根源現象に触れることによって自ずと自覚する、このことがゲーテの自然感情にもとづく宗教的世界の原点であった。そして彼にとっては、自然万有の生命活動は、神の内に、

合一と分裂、収縮と拡張という「両極性」（Polarität）をもって「変態」（Metamorphose）し、永遠から永遠へと螺旋的に「高進」（Steigerung）することにその本質をもつ。この自然生命の「純粋活動」（reine Tätigkeit）が人間存在の中にあっては、本能的行為として発動し、自然界における「高進」が、人間界にあっては、「至高存在への絶えざる努力」（zum höchsten Dasein immerfort zu streben）[2]として位置づけられるように思われる。それゆえに『ファウスト』の中では、「人間は努力する限り迷う」[3]という詩行と「常に努力して励む者を／私たちは救うことができる」[4]という詩行とが対をなし、努力が救済の正因であることが示されるのである。

しかし「常に悪を欲っして常に善をなす、／あの力の一部です」[5]と名告るメフィストフェレス（Mephistopheles）を伴ってのファウストの努力が、実は第一部においては、グレートヒェン悲劇を惹き起こしてゆくことになる。つまり、ファウストの愛を受け入れた彼女は、ある夜、彼から与えられた眠り薬の投与分量をまちがえて母を殺してしまう。また彼女の堕落を知った兄は、ファウストとメフィストを相手に決闘をし、逆に刺し殺される。やがて彼女は、ファウストとの間の不義密会から生まれた子供を、苦悩の末に池へ投げ込み、私生児殺しの重罪で獄死する。また第二部においても、「自由な土地に自由な民と共に生きる」[6]ことを願ったファウストの、限界を知らない自我拡張欲は、深い神への信仰に生きるフィレモンとバウチスという老夫婦に対して、家の立ちのき交換を迫る。支配者にとっての自由は被支配者にとっては強制であり、交換は強奪に他ならない。そして結果的には、この二人はメフィストとその手下によって、ファウストの思いに反して殺されてしまうことになる。このような、生涯、悔改の念を示さないファウストの行為に対して、厳正なキリスト教的倫理観をもった人たちは、これがはたして救済に価する努力であろうか、と憤慨する。しかしゲーテはこの罪悪深重のファウストを作品の中で救済してしまう。このことはゲーテの救済観がキリスト教のそれと異なっているからに他ならない。つまりゲーテにとっては、救済の正因としての努力とは、自然（神）を生きることなのである。「努力」（Streben）＝「生」（Leben）＝「純粋活動」（reine Tätigkeit）。このような各人に固有の生本能の働きとしての努力は、善悪を超えた自然（神）の純粋活動に他ならない。彼にとっては「神から恵まれた人間本性」は、神性そのものであるがゆえに、「至高存在への絶えざる努力」を、意識や意志の有

無を問わず、本能的に自己自身に対して要請している。従って人間はみな、善根（原徳）をもった存在であり、その存在の完成を常に神性から願われているのである。

善い人間は、暗い衝動に動かされても、
正しい道を忘れはしないものだ。[7]

この主（神）の口を通して語られる「善い人間」（ein guter Mensch）とは、直接的にはファウストを指しているが、ゲーテの宗教観からすれば、善根をもったすべての人間を意味している。信心が決定していようが、未決定（「暗い衝動」）の状態にあろうが、人間は神性から常に人間成就を願われた存在である。ファウストは、キリスト教的倫理観からすれば悪人そのものであり、救済は不可能とされるのは当然であろう。しかしゲーテの宗教観からすれば、この悪人を救わずして、神は神たることができない。努力・行為というものは、いかに善なる方向を意志しても、結果は悪の場合もあり、また逆に、メフィストのように悪を志向しても、それによって人間に良心を喚び起こさせる結果になる場合もある。このことを一番よく自覚していたのがゲーテである。従って、彼にとっては努力・行為の結果が救済の可否を決定する要因なのではなく、置かれた境遇の中で、いかに自己の生を完全燃焼させるか、即ち、いかに自然の純粋活動と同質の自己の努力・行為を展開するかが問題なのである。自己を原罪の観念によって縛りつけ、信仰という名の自己否定によって、自己の生の全的展開（努力）を阻止することこそが、ゲーテにとっては神性の純粋活動への反逆なのである。むしろ、自己を原徳の観念によって肯定し、信仰を必要とすることなく、自然（神）と自己との本質的、同一性のゆえに、「自己自身に対する畏敬」（die Ehrfurcht vor sich selbst）をもって自己の生を全的に展開することこそが、彼にとっては救済の正因でなければならない。

ゲーテは『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』（Wilhelm Meisters Wanderjahre）において、畏敬の向う方向から宗教を三種に規定している。[8]

①「我々の上にあるものに対する畏敬」にもとづく宗教――民族的宗教
②「我々と等しいものに対する畏敬」にもとづく宗教――哲学的宗教
③「我々の下にあるものに対する畏敬」にもとづく宗教――キリスト教的宗教

①は、諸民族の宗教であり、②は、より高いものは自分まで引き下げ、より低いものは自分まで引き上げて、賢者ら

しく、ただ独り真理に生きる宗教、③は、卑賤と貧困、嘲笑と侮蔑、恥辱と悲惨、苦悩と死をも神的なものと認め、罪悪と犯罪をさえ聖なるものの障害ではなくて、その促進として愛するに至るところの、人類が到達しえた、また到達せずにはいられなかった窮極の宗教、とゲーテは言う。そしてこの三つの宗教が一つになって初めて「真の宗教」(die wahre Religion) が生み出され、またこの三つの畏敬から最高の畏敬、即ち「自己自身に対する畏敬」が生まれるのであり、また逆に、この最高の畏敬から各々の三つの畏敬が生育するのだと言う。

このような表明からも明白なように、ゲーテにとっては、自己を否定するのではなく、「自己自身に対する畏敬」をもって自己を肯定し、自己の生の全的展開をはかるのである。それゆえに、彼にとっては、「初めに言葉ありき」(Im Anfang war das Wort!) ではなく、「初めに行為ありき」(Im Anfang war die Tat!)[9] ということが、重要な意味をもってくることになる。行為の結果が問題なのではなく、ゲーテにとっては、努力・行為そのものが、人間成就としての救済の正因なのである。

ゲーテは、自然（神）の中に愛と純粋活動としての行為とを、根源現象を通して直観した。自然（神）は人間に対して、

汝の努力は愛にあれ、
汝の生は行為でこそあれ。[10]

と要請している。これに応える世界、それがゲーテの宗教的世界なのである。

註

一

① Maximen und Reflexionen (MuR. と略す), 807.
Wir Sind naturforschend Pantheisten, dichtend Polytheisten, sittlich Monotheisten.

② Eckermann Gespräche mit Goethe (Eckermann と略す), 28. 2. 1831

③ Eckermann, 31. 12. 1823
Die Leute traktieren ihn, als wäre das unbegreifliche, gar nicht auszudenkende höchste Wesen nicht viel mehr als ihresgleichen. .....Wären sie aber durchdrungen von seiner Größe, sie würden verstummen und ihn vor Verehrung nicht nennen mögen.

④ MuR., 809.
„Ich glaube einen Gott!" dies ist ein schönes, löbliches Wort; aber Gott anerkennen, wo und wie er sich offenbare, da ist eigentlich die Seligkeit auf Erden.

⑮ Goethes Werke, Hamburger Ausgabe (H.A. ハンブルク) 10, 511.

Gott in der Natur, die Natur in Gott zu sehen

⑯ H.A. 9, 490.

Alles sollte notwendig sein und deswegen kein Gott.

⑰ H.A. 10, 16.

daß es ihm (=Lavater) unbegreiflich schien, wie ein Mensch leben und atmen könne, ohne zugleich ein Christ zu sein.

⑱ H.A. 10, 16.

Entweder Christ oder Atheist! .....so könnte ich mich wohl auch zum Atheismus entschließen,

⑲ An Jacobi, 9. 6. 1785

Du erkennst die höchste Realität an, welche der Grund des ganzen Spinozismus ist, worauf alles übrige ruht, woraus alles übrige fliest. Er beweist nicht das Daseyn Gottes, das Daseyn ist Gott. Und wenn ihn andre deshalb Atheum schelten, so mögte ich ihn theissimum ia christianissimum nennen und preisen.

⑳ An Jacobi, 9. 6. 1785

.....von einem göttlichen Wesen ....., das ich nur in und aus den rebus singularibus erkenne,

㉑ H.A. 1, 369.

Kein Wesen kann zu Nichts zerfallen!
Das Ew'ge regt sich fort in allen,
Am Sein erhalte dich beglückt!
Das Sein ist ewig; denn Gesetze
Bewahren die lebend'gen Schätze,
Aus welchen sich das All geschmückt.

㉒ H.A. 1, 367.

Wer Wissenschaft und Kunst besitzt,
Hat auch Religion;
Wer jene beiden nicht besitzt,
Der habe Religion.

11

① H.A. 13, 488.

Das Geeinte zu entzweien, das Entzweite zu einigen, ist das Leben der Natur.

② H.A. 13, 471.

da, wo alles ein vollkommenes Ganze zusammen ausmachen soll, kann sich nicht hier und da etwas Spezifisches absondern.

③ H.A. 13, 55.

ein Trieb, die lebendigen Bildungen als solche zu erkennen, ihre äußern sichtbaren, greiflichen Teile im Zusammenhange zu erfassen, sie als Andeutungen des Innen aufzunehmen und so das Ganze in der

Anschauung gewissermaßen zu beherrschen.

④ Eckermann, 13. 2. 1829

Der Verstand reicht zu ihr nicht hinauf, der Mensch muß fähig sein, sich zur höchsten Vernunft erheben zu können, um an die Gottheit zu rühren, die sich in Urphänomenen, physischen wie sittlichen offenbaret, hinter denen sie sich hält und die von ihr ausgehen.

⑤ MuR., 619.

Das Wahre ist gottähnlich: es erscheint nicht unmittelbar, wir müssen es aus seinen Manifestationen erraten.

⑥ MuR., 1369.

Urphänomen

ideal als das letzte Erkennbare,
real als erkannt,
symbolisch, weil es alle Fälle begreift,
identisch mit allen Fällen.

|1|

① MuR., 815.

Glaube ist Liebe zum Unsichtbaren, Vertrauen aufs Unmögliche, Unwahrschenliche.

② Eckermann, 11. 3. 1832

Fragt man mich: ob es in meiner Natur sei, ihm anbetende Ehrfurcht erweisen? so sage ich: durchaus!—Ich beuge mich vor ihm, als der göttlichen Offenbarung des höchsten Prinzips der Sittlichkeit. —Fragt man mich, ob es in meiner Natur sei, die Sonne zu verehren, so sage ich abermals: durchaus! Denn sie ist gleichfalls eine Offenbarung des Höchsten, und zwar die mächtigste die uns Erdenkindern wahrzunehmen vergönnt ist.

③ MuR., 335.

Im Ganzen ist es ehrwürdig und im Einzelnen anwendbar.

④ Eckermann, 11. 3. 1832

⑤ Eckermann, 28. 2. 1831

daß alle Religionen nicht unmittelbar von Gott selber gegeben worden, sondern daß sie, als das Werk vorzüglicher Menschen, für das Bedürfniß und die Faßlichkeit einer großen Masse ihres Gleichen berechnet sind.

⑥ Eckermann, 28. 2. 1831

Christus dachte einen alleinigen Gott, dem er alle die *Eigenschaften beilegte, die er in sich selbst als Vollkommenheiten* empfand. Er ward das Wesen seines eigenen schönen Innern, voll Güte und Liebe wie er selber.

㊐ Eckermann, 28. 2. 1831

Da nun aber das große Wesen, welches wir die Gottheit nennen, sich nicht bloß im Menschen, sondern auch in einer reichen gewaltigen Natur, und in mächtigen Weltbegebenheiten ausspricht, so kann auch natürlich eine nach menschlichen Eigenschaften von ihm gebildete Vorstellung nicht ausreichen.

㊀ Eckermann, 20. 2. 1831

indem er andere Geschöpfe als passende Nahrung verschlingt, erkennet er seinen Gott, und preiset dessen Güte, die so väterlich für ihn gesorget.

㊁ Eckermann, 28. 2. 1831

Übrigens ist die Natur und sind wir Menschen alle vom Göttlichen so durchdrungen, daß es uns hält, daß wir darin leben, weben und sind, daß wir nach ewigen Gesetzen leiden und uns freuen, daß wir sie ausüben und daß sie an uns ausgeübt werden, gleichviel ob wir sie erkennen oder nicht.

㊂ H.A. 1, 357.

Was wär ein Gott, der nur von außen stieße,
Im Kreis das All am Finger laufen ließe!
Ihm ziemt's, die Welt im Innern zu bewegen,
Natur in Sich, Sich in Natur zu hegen,
So daß, was in Ihm lebt und webt und ist,
Nie Seine Kraft, nie Seinen Geist vermißt.

㊃ Eckermann, 29. 5. 1831

Beseelte Gott den Vogel nicht mit diesem allmächtigen Trieb gegen seine Jungen, und ginge das Gleiche nicht durch alles Lebendige der ganzen Natur, die Welt würde nicht bestehen können! – So aber ist die göttliche Kraft überall verbreitet und die ewige Liebe überall wirksam.

㊄ Eckermann, 29. 5. 1831

das, die Welt erhaltende, durch die ganze Natur gehende, ernährende Prinzip
die wahren Symbole der Allgegenwart Gottes

目

㊀ Goethe Sämtliche Werke, Artemis-Gedenkausgabe 14, 860.

Wenn gewisse Erscheinungen an der menschlichen Natur, betrachtet von seiten der Sittlichkeit, uns nötigen, ihr eine Art von radikalem Bösen, eine Erbsünde zuzuschreiben, so fordern andere Manifestationen derselben: ihr gleichfalls eine Erbtugend, eine angeborene Güte, Rechtlichkeit und besonders eine Neigung zur Ehrfurcht zuzugestehen.

㊁ H.A. 10, 44.

einen gewissen Keim zugestehen, welcher, durch göttliche Gnade belebt, zu einem frohen Baume geistiger Glückseligkeit emporwachsen könne.

③ Eckermann, 11. 3. 1832

④ H.A. 7, 404.

„Wenn wir uns", sagte er einmal, „als möglich denken können, daß der Schöpfer der Welt selbst die Gestalt seiner Kreatur angenommen und auf ihre Art und Weise sich eine Zeitlang auf der Welt befunden habe, so muß uns dieses Geschöpf schon unendlich vollkommen erscheinen, weil sich der Schöpfer so innig damit vereinigen konnte. Es muß also in dem Begriff des Menschen kein Widerspruch mit dem Begriff der Gottheit liegen, und wenn wir auch oft eine gewisse Unähnlichkeit und Entfernung von ihr empfinden, so ist es doch um desto mehr unsre Schuldigkeit, nicht immer wie der Advokat des bösen Geistes nur auf die Blößen und Schwächen unserer Natur zu sehen, sondern eher alle Vollkommenheiten aufzusuchen, wodurch wir die Ansprüche unsrer Gottähnlichkeit bestätigen können."

和訳は、筑摩書房「世界文学大系20」の関泰祐氏に拠る。

⑤ H.A. 13, 7.

Der Begriff vom Dasein und der Vollkommenheit ist ein und ebenderselbe.

⑥ An Jacobi, 9. 6. 1785

⑦ H.A. 9, 138.

Die allgemeine, die natürliche Religion bedarf eigentlich keines Glaubens: denn die Überzeugung, daß ein großes, hervorbringendes, ordnendes und leitendes Wesen sich gleichsam hinter der Natur verberge, um sich uns faßlich zu machen, eine solche Überzeugung dringt sich einem jeden auf; ja wenn er auch den Faden derselben, der ihn durchs Leben führt, manchmal fahren ließe, so wird er ihn doch gleich und überall wieder aufnehmen können.

⑧ H.A. 10, 35

Wer Gott recht liebt, muß nicht verlangen, daß Gott ihn wieder liebe.

『エチカ』第五部命題十九

五

① H.A. 2, 135.

Auf das Anschauen der Natur gründete sich der alten Parsen Gottesverehrung.

② Faust, 4685.

Zum höchsten immerfort zu streben

③ Faust, 317.

Es irrt der Mensch, solang' er strebt.

④ Faust, 11936f.

Wer immer strebend sich bemüht,
Den können wir erlösen.

⑤ Faust, 1336f.

Ein Teil von jener Kraft,
Die stets das Böse will und stets das Gute schafft.

⑥ Faust, 11580.

Auf freiem Grund mit freiem Volke stehen.

⑦ Faust, 328f.

Ein guter Mensch in seinem dunklen Drange
Ist sich des rechten Weges wohl bewußt.

⑧ H.A. 8, 156f.

㊀ Die Religion, welche auf Ehrfurcht vor dem, was über uns ist, beruht, —die Religion der Völker

㊁ Die zweite Religion, die sich auf jene Ehrfurcht gründet, die wir vor dem haben, was uns gleich ist, —die philosophische (Religion)

㊂ Nun ist aber von der dritten Religion zu sprechen, gegründet auf die Ehrfurcht vor dem, was unter uns ist, —die christliche (Religion)

⑨ Faust, 1237.

⑩ H.A. 8, 312.

Und dein Streben, seis in Liebe,
Und dein Leben sei die Tat.

（本学教授　ドイツ文学）